桃源七郷集　上

イ七六八号

イ 4
3157
27(1)

イ4 3157 27 (1)

さいつ日よの人ゝほりうち風な子周さしのうしろに行
あふけしる直へゆきたれへきらず行りてあなたこなたと
めぐりてしちひさきんはなみよりいふれはられぬん
そぞ紙言ふれ屋く世ふりて傍くさる紙川のふく
みしく此ん紙欺へる人の枕をはじめとせずへんとの
おもしきのすいさえるれいたそやらく岁子え人
うさかめ教をかく新ん川冊子に形して風あそびを
雲ふ海る乃中さちてた趣ん所そのうしとといさくろ
たしめふ志らしひてんやとしいふそのれ紙魚てふ
虫乃すゝせおりてふるあうこぬくしえるもいやさ
さいうんのあぶうさうれひとれ居るさうひしとえふよる

の篇紙さんへられまへされてみそうりまことそうもん
未いそそう紙閑をくろおきるしもあくさめ紙を
ひるとすしにいふ乃き京いふきそらくハ井りく
拐士めれを布や閑つんむりし蕭詞をそ五紙紙
ちくへのかしらよ書てるふこれの策よ縮あいまよ子周
八士郎と経つら乃ゆうふさらえて浅のふ臆よせん
とんれ七紙そ清藝の七經ともやうんな唐倭なの
さうんかえうしとよもそんな同しこうすへしとやく
様本まらうくあさく風月れさえんとたちゆけよううら

聾若水母散人呉竹のまれやれ田れ
えりされ

春乃日

曙見んと人〳〵しけれは熱田におもむきぬ
渡し舟さハかしくなりゆく比並松乃みとり見えわたりて
いとのとかなり重五か桜折てそへける竹墻おしちらさす
まもりけるさ乃ゑみしまをおもひ出侍る

二月十八日

春めくや人さまさまの伊勢参　荷兮
桜ちる中馬なかく連　重五
山かすむ月一時に館立て　雨桐
濯なうしれ出家にあるるなき　李风
志ほ風によく〳〵聞は鷗なく　昌圭
くさりを沖乃岩にかくつなく　桃李
ウ須广寺に汗の帷子脱ぬ替　重五
をのしなるゝ笛を戴く　荷兮
文王乃をやしよりかをおきはりて　李风
雨の霽は角乃たゝき草　雨桐
乳ぶさゝ一度ハ骨をかくあに　荷兮
傾城乳をかくして晨明　昌圭
霧たなふ續は人の影稲て　雨桐
わやくと乃く神輿(ミコシ)つく里　重五
ゑる君(ヲトナ)よりも出真(タコ)の振ゆく　昌圭
花に男乃鳥高あくるは　李风
柳より旅路そあちらに藥なをや　重五

二

入る日ハ陳いそくなり　荷兮

こけうりし表に坊主に連行く　李凡

うれ嬉し　梓きて　かれ　西相

思髪をたちゐる　ふし切路し　荷兮

いとほうしさき　五位乃汁立　昌圭

松乃木よ置引き門を流して　西相

とりとりし絹もコヘしぬ問ふぞ　童五

飲朗豆腐を鳶にそよぎける　昌圭

念佛さぬきれ　秋あられ也　李凡

穗蓼生ふ籬を狩にて　童五

家名を橋乃名によぶ月　荷兮

傘乃内色ありよたる西の昏ふ　李凡

飲鐵お家く　出家めくし　西相

ウ

わしぎんほ行てをふ寄よまん　荷兮

絹瓶ひとへ川を二人して　わきを　昌圭

世ふかわまぬ屑漉よ卑りて　西相

記念よをふに嵯峨乃昔畑　童五

いくまを花し行よいそうしく　昌圭

身もなも高とりよ中く　李凡

三月六日晩水亭にて

且藁

京ん坂や畑より山の八そさくら　野水

折しろふよむさくの鐘

春の旅芳ん他家ふるん積みて　荷兮

口をしく人は清ミなりけり　越人
松風またれぬ絃乃海れ琴　羽笠
蕣のちらしは出てそゝ月　執筆
ウ
笠ぬきさき泰楽道よりけり　野水
篤ある垣にうれすつきさく　且藁
表町西行はく二人髭剃ん　越人
暁いかり車ゆくとし　荷兮
鰒負つく大津の湊へ入にけり　且藁
何せしやんまゐ出乃舞　越人
旅役あつはそらを敷せりて　羽笠
萩ふとたわん一月日のちら　冬文
里人は薦を施を媒乃西　越人

月なき浪に重石をく橋　羽笠
二
おちつきは木乃根は花の鮎もらん　冬文
汎こきて春の温泉の山　且藁
のとかしや絶崇乃跡修業僧　越人
内侍のえらし代られ眉乃図　荷兮
物おもふ單衣の中八月つきに　羽笠
名もかたち栗とちしや七ケ　野水
大年を念佛三昧恵美次棚　且藁
そを見出て無学よ上り陰や　越人
野分の草乃ある枸杷うべき　荷兮
まま京は廿日ならぬ妻の粉　羽笠
一夜の祭を馬に寺衆れや　冬文

これ碪まつるをいりゝき乃月　且藁
陽炎乃うしのあたりま婦えて　越人
まゆ毛ぬりけば音ひゞしく　荷兮
ウ田とおくむらゝ家里よせくり　羽笠
力乃節をはなし中乃子　野水
漣や三井のまるれ絵とりよ　且藁
るひく乃しらぬ雪の山く　越人
えつきさり木九日乃月さむき　荷兮
君乃住とめ子添ふとも　羽笠

三月十六日且藁か田家にとゞまりて
蛙乃ゝきゝゝ聞しまき三旅ゑんか　野水

額にあつ子秋の雨まそり　且藁
厳京ゞ岩木乃奥ゞ宿りて　越人
まうしく人とゝゞ馬乃子　荷兮
立て乃ゝ渡しの舟乃月影よ　冬文
芦の穂を摘る傘の端　[illegible]
ウ磯ぎはに施餓鬼の僧の集りて　且藁
岩のあはひより蓑ゝゝ里　埜水
雨乃日も瓶焼せん煙にて　荷兮
ひだるきゝも旅乃一はに　越人
端にゞ坊主ハ綴きん緒抄りて　埜水
解てやをかゝねむさよ松　冬文
今やあた更なりとて中ゝね

月十九日荷兮室にて

咲きゝの菊にもたふしき白露を　越人

秋の和名にかゝる順　且藁

初ゞの夢をこひる火を打ぬ　冬文

別の月にかくしてあらむ隣　荷兮

絃ぞ花の宮より唐輪にて　且藁

恙ゆく道の笠にあつらし　埜水

二

名のきりやと鮎を川ろに落る人　荷兮

黄乃子花生ある玉ころの中　越人

鉛鴟か瓢をあけて並ばかく　埜水

連舞のまじれあそばれそし　冬文

流壺の業押まきて書き見ん　越人

岩苔より乃篭にさまゝ生　且藁

むさかりに夜見てありく世の中に　冬文

莚二枚もひろきこの庵　越人

朝毎乃露あはれさに麦飽ん　且藁

寒からを送る家まぬくの月　埜水

風の噂き秋の日舟に網入よ　荷兮

鳥羽乃湊れ物しの笑ひに　冬文

あるまじれさこね絲たき尽く遁ぬ　埜水

はなくし一助筆の名さまし　荷兮

家立乃茶の段に宣紀て　越人

縁を答たいさゝか是この代　且藁

山も花本のよしみ敷日に　冬文

暑しんでしらぬ雲雀の聲あり　荷兮

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のあをき池のくまれ水　越人

蝶ふれて小松の岩ゑし　舟泉

きはよなや綿晒をる雪あかりて　聴雪

行幸のあとに添ふ土器　鈴聲

朔日を窓より鍛冶のいそがしく　荷兮

月たらぬ雲の門をあけ　執筆

春

昌陸乃松とは見ぬ御代の春　利重

元日の木めるの競馬見ゆし　童五

初春乃遠里牛のなき日かな　昌圭

かささの春海を見てあり春の景　雨桐

門に松芍薬園の雪さむし　舟泉

鯉の音水ぐらく梅白し　羽笠

舟くしの小松に雪の残りけり　且藁

曙の人顔牡丹霞にひらきけり　杜国

麓てら次元日里の騒りこつれ　犀夕

星さへしゝかとまぬ先の空の色　呑霞

ゆきても小松負つる牛の姿　聴雪

朝日二分柳の動く匂ひかな　荷兮

先ゆく牛の来ひくき霞かな　同

芹摘とてこけて泥おさ袂かな　且藁

のりまさる人乃行くかりとて
みちのくまで白鷺いやし雲雀とて　越人
古池や蛙飛こむ水乃音　芭蕉
傘張乃睡り胡蝶のやどり哉　重五
山や花墻根墻根の酒ばやし　亀洞
花にうづもれて夢より直に死なん哉　越人

春野吟

足跡に桜を曲る庵二つ　杜国
藤寺かくれぬりれてさくら哉　李風
桜まてゝ桜乃遅き哉なれ　荷兮

餞別

蒼の花まくらへ川にて別れ　越人

山畑乃茶つみぞかざす夕日かな　重五
蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春の暮　旦

夏

かへさそ乃山ろは尾八愁し　九白
郭公さゆめのく嬉しぬの宿に　李風
かつこ鳥板屋乃背戸の一里塚　越人
うれしさは葉がくれ梅の一つ哉　杜国
若竹のうらふみたるゝ雀かな　亀洞
傘をさしまて蛍い夜ぶかに　舟泉
武蔵坊をとぶらふ
まどかもや志つく中の衣川　商露
逢坂乃関八望三舟の別るゝ

てるらへまおくれさりなり夜の月　髄雪

老聃曰知足之足常足

夕かほに雑炊あつき菴かな　越人

篇木の微雨こぼれて峰数に　柳両

はしきまハなかむるおに暮まり　塵交

萱草ハ俵に黒き花の色　荷兮

蓮池のふかさわするゝ浮葉かな　仝

暁の夏陰茶屋の遅きかな　昌圭

夏川の音に宿かる木曽路哉　重五

譬喩品ノ三車無安猶如火宅

とひよるかを

六月の汗ぬぐひ居る臺かな　越人

秋

燈てし畑なすび葉をみそちくれ　且藁

貧家の玉祭

玉祭柱にむかふ夕かな　越人

たきしさまさ二藤入つる秋に　雨桐

あれし人をやとも月夜に　芭蕉

山里は家淋しくかの月夜に　越人

尾ふく家も面白しや秋の月　野水

八嶋をかきし屏風の絵にそて

具足着て顔のみ多し月見舟　仝

侍恋

こぬ人をとゝや来るしき見知らさん　荷兮

閑居増恋

秋ひとり琴柱はづれて寝ぬ夜かな　荷兮

朝白はすゑ一りんに成にけり　舟泉

冬

るちぬ患牛八夕日の村しくれ　杜国

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申　大垣住 如行

霜め京葬の子乃落うれ　昌碧

馬をさへながむる雪のあした哉　芭蕉

り焼の煤けをそゝきすみかれ　越人

芭蕉翁をおくりてかへる時

この比の氷ふみわる名残かな　杜国

隠士にかりたる室をかへすとて

あたらしき茶袋ひとつ冬籠　荷兮

冬の日

笠は長途の雨にほころひ帋衣はとまり〳〵のあらしに
もめたり侘つくしたるわひ人我さへあはれにおほえける
昔狂哥の才士此国にたどりし事を不図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　芭蕉
たそやとばしるかさの山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国
日のちり〳〵に野に米を刈　正平
わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水
髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
きえぬそとばにすご〳〵となく　荷兮
影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉
あるじはひんにたえし虚家　杜国
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
霧にふね引人はちんばか　野水
たそかれを横にながむる月ほそし　杜国
となりさかしき町に下り居る　重五
二の尼に近衛の花のさかりきく　野水
蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
のり物に簾透顔おぼろなる　重五

いまぞ恨の矢をはなつ声　荷兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉
しばし宗祇の名を付し水　杜国
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣　野水
しらじらと砕けしは人の骨か何　杜国
烏賊はゑびすの国のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけし郭公　野水
秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五
巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮
うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉

箕に鮗の魚をいたゞき　杜国
わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮
けふはいもとのまゆかきにゆき　野水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜国
廊下は藤のかげつたふ也　重五

おもへども壮年
いまだころもを振はず　埜水

はつ雪のことしも袴きてかへる
霜にまだ見る蕣の食　杜国
野菊まで尋ぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うつらふけれとくるまひきけり　荷兮

麻呂か月袖に鞨鼓をならすらん　重五
桃花をたをる貞徳の富　正平
雨こゆる浅香の田螺ほりうへて　杜國
奥のきさらぎを只なきになく　楚水
床ふけて語ればいとこなる男　荷兮
縁さまたけの恨をのこりし　まさ秀(?)
口おしと瘤をちきる力なき　野水
明日はかたきにくび送りせん　重五
小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月は遅かれ牡丹ぬす人　杜國
縄あみのかゝりはやふれ壁落て　重五
古川にしとめて萩切町　荷兮

秋ぐれの空なり嫁乃いかりしく　杜國
うぶ湯いくられもえたのえゆさ　野水
粽をこに餅をとゆる縁やきぬのあまる　このゑれ(?)
うつひきて起それの館よくして　芭蕉
篠ふかく梢は椿に蕎さいし　野水
三絃かしん不破のせきさし人　重五
猶きくら尖法て寺乃基を言る　芭蕉
孫きるしのさてしも七十　杜國
奉加めれは清もちに重うちにあるへ　重五
ひとりの傘は下率(コツ)りさし次　荷兮
蓮池に鷺のそを数て夕ナるま　杜國
まどくるつくうち荷(りえやう)櫚とさくさ　野水

月はをそてる唐猫の髪赤枯て　荷兮
恋せぬきぬた臨済をまつ　羽笠
秋蟬の虚に声きくしづかさは　野水
藤の実つたふ雫ぽつちり　重五
袂より硯をひらき山にむかへ　芭蕉
ひとりは典侍の局か内侍か　杜国
三ケの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ　重五
しら髪いさむ越の独活苅　荷兮

つゑひく事僅に十歩

つゝみかねて月とり落す霽かな　杜国
こほりふみ行水のいなづま　重五

歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水
北の御門をおしあけのはる　芭蕉
馬糞掻(カク)あふぎに風の打かすみ　荷兮
茶の湯者おしむ野べの蒲公英(タンポポ)　正平
らうたげに物よむ娘かしづきて　羽笠
燈籠ふたつになさけくらぶる　杜国
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　芭蕉
蕎麦さへ青し滋賀楽(カラキ)の坊　野水
朝月夜双六うちの旅ねして　杜国
紅花買(カフ)みちにほとゝぎすきく　荷兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　野水
命婦の君より米なんどこす　重五

まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮
佛喰たる魚解きけり　芭蕉
縣ふるはな見次郎と仰がれて　重五
五形菫の畠六反　杜国
うれしげに囀る雲雀ちりちりと　芭蕉
真昼の馬のねぶたがほ也　野水
岡崎や矢矧の橋のながきかな　杜国
庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮
捨し子は柴苅長にのびつらん　野水
晦日をさむく刀賣る年　重五
雪の狂呉の國の笠めづらしき　荷兮
襟に高雄が片袖をとく　ばせを

あた人と樗を梯に香焼ん　重五
芥子のひとへに名をこぼす禅　杜国
三ケ月の東は暗く鐘の聲　芭蕉
秋湖かすかに琴かへす者　野水
烹る事をゆるしてしぎを放ける　杜国
聲よき念佛藪をへだつる　荷兮
かげうすき行燈けしに起侘て　野水
おもひかねつの川も夢路の帯引　重五
おのれ花たえしぬる花の字を文　荷兮
うの花に白日をこゑも打吹く　羽笠
なまふ波津にありし大僧あさまにけれとも

炭賣のをのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひを鏡磨寒　荷兮
花蕀馬骨の霜に咲かへり　杜国
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠
賀茂川や胡麻千代祭り微近み　荷兮
いはくらの聟なつかしのころ　重五
おもふこと布搗哥にわらはれて　野水
うきははたちを越る三平　杜国
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火をかぬ火燵なき人を見む　芭蕉

門守の翁に紙子かりて寝る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　杜国
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣桜の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはず款冬を呑　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
宣旨かしこく釵を鋳る　重五
八十年を三つ見る童母もちて　野水
なかだちそむる七夕のつま　杜国
西南に桂のはなのつぼむとき　羽笠
蘭のあぶらに卜木うつ音　芭蕉

絲の光り賢なる女かたちのつる　童五
糸瓶に粟をあらし小日のくれ　荷兮
まかりまく揺子かさるゝ小月よ　杜国
隠で来る向る兵装乃衣　野水
寅乃日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雪かかりけり南京の地(ツチ)　羽笠
いかさして待るる知ぬ人の像　荷兮
泥よせたるのこゝろえれ芹の根　重五
粥すゝるあかつき花にかしこまり　野水
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北のかたなくなく簾おしやりて　羽笠
蛙のきゝぬ夢を責るむしかな　杜国

田家眺望

霜月や鸛(カウ)の彳々(ツヽ)ならびゐて　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜国
音もなき具足に月のうすうすと　羽笠
酌とる童(ハツハ)蘭切にいでゝ　野水
秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉
漸くはれて富士みゆる寺　荷兮
寂として椿の花の落る音　杜国
茶に糸遊をそむる風の香　重五

雛追に烏帽子の女五三十　野水
庭に木曾作るこひの薄衣　羽笠
なつふかき山橘にさくらみん　荷兮
麻かりといふ哥の集あむ　芭蕉
江をちかく独楽庵と世を捨て　重五
我月出よ身をおぼろなる　杜国
たび衣笛に落花を打払　羽笠
篭輿ゆるす木戸の山守　野水
骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉
乞食の簑をもらふしのゝめ　荷兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜国
御幸に進む水のみくすり　重五

ことにてる年の小角豆の花もろし　野水
萱やまばらに炭団つく臼　羽笠
芥子あまの小坊主籠に母むかへ　荷兮
おるゝはすのみたてる蓮の実　芭蕉
しづかさに飯臺のぞく月の前　重五
露をくきつね風やかなしき　杜国
釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水
元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　荷兮
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜国
春のしらすと雪ぞさゞらよふ　重五

水干を秀句の聖わかゆかし　野水
山茶花匂ふ笠のこがらし　羽笠

追加

いかにみよと難面うしをうつ霰　羽笠
樽火にあぶるかれうの杙　荷兮
くさ萌下萌に斧をちやきとて　重五
檜笠に宗祇屋川を約る　杜国
浪より晴かゝる月を見る海　芭蕉
ひとつの樽をもとうの波草山　楚水

ひさご

江南乃珍碩我尓ひさごを送てこれハ是水漉を
する器にもあらずあむ器にもあらず或ハ大樽に造て
江湖をわたれといへるふくべも異なり吾それの
惠子が手して用ある事を知しらんつらくその日月
に瞻てあ千歳のてはけふかへ隔る醉くつゝ
陽秋をさらくこえんして雪れあけ初の闇の郭公も
うきまさるて纔く花を苦ぬ人もつゝきくひさきを皆
風雅乃藤黒をとりて是をつとめ是ひとりのゆふさかり
からて乾坤の外なる人を出らくそのことをとく毎日
此の内よなくしり入

元禄三六月

越智越人

花見

木のもとに汁も鱠も桜かな　翁
西日のどかによき天気なり　珍碩
旅人の虱かき行く春暮て　曲水
はきも習はぬ太刀の鞘　翁
月待て仮の内裏の司召　碩
籾臼つくる杣がはやわざ　水
鞍置る三歳駒に秋の来て　翁
名はさまざまに降替る雨　碩
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水
中にもせいの高き山伏　翁

いふかを喚て方え出落しけり　碩
小やさ節よさ念仏のりけり　水
抱れりふ身そその噂してせう哉　翁
月見れ顔乃袖ぬれそき露　碩
秋風の糸をこえつる波の音　水
厚ゆくころさや白子いふ松　翁
千部読花乃盛りの一分田　碩
廻れ死める店のころきう上　水
何よ守を誅の現をおそれける　翁
文出わしの力さく打しき　碩
羅漢目をいしそうと汰かさち　水
然世みつ然と泣のかひけり　翁

手をつ紀れ哭さるの碩よ　碩
酒でそけれあ藏畑境　水
政六乃国をゆくくまて實心て　翁
假れ持併をむりよ念仏　碩
中りしま土間ふ飛まへ蛍落　水
気名る里のかふうそその地　翁
蔭れていしぬ濯乃紀を黄　碩
月秋くしふ明渡る月　水
花落あまりすまけんそろ枯て　翁
唯　四方打る草　菴の露　碩
一貫れ銭むつしと画けり　水
醫者乃まちまち八飲ぬかな　翁

花咲けば芳野あたりを欠廻り　水
虻にさゝるゝ春の山中　碩
翁十二　珎碩十二　曲水十二

いろいろの名もむつかしや春の草　珎碩
うたれて蝶の夢はさめぬる　翁
蝙蝠ののどかにつらをさし出して　路通
かる菴乃ふくともしらぬ御越なり　仝
紫蘇の実をかますに入るる夕暮　碩
親子ならびて月に物くふ　仝
秋の色宮ものぞかせ給ひけり　通
うきをそろまくハうらふ　仝

うつり香の羽織を首にひきまきて　碩
小六うたひし市のかへるさ　仝
艶鶴乃ちいさく見ゆる川の端　通
念仏申ておがむみづかき　仝
こしらへし薬もうれぬ年の暮　碩
庄屋の里乃犬よ投されて　仝
旅姿稚き人乃嫗連れて　通
花盛をあてゝのみよ月ハ猶秋　仝
志賀のさと橡の下も日和なり　碩
生鯛あがる浦のきさらぎ　仝
此村の廣されて驚青ぬおつかり　荷兮
おくられんこけやの志わりとりて　越人

かそふつさる古き退屈もせぬよる　分
ましと酒わるし酒乃行えとハ　人
なこの先やる秋乃夕をきて見き　分
蕎麦きた白り山の胴中　人
うやんうり里乃もられ月の影　分
とりくそつ子のここか裸ねし　人
免つりしやす色亭えとまとき　分
文珠の智恵も槃特の愚癡　人
かうれか減又ハおまひし不味噌　分
物しもそぬる落る鵜相　人
春のよ桜の花うらみて笑ふ　分
香りふるて鼓をならして　仝

汗の香をかしこそ衣をきし　人
ものうきことろありそふる　仝
花さくりて文百人まて膳立よ　分
春ハ旅とも行をそさる旅　仝

珍碩九　翁一　路通八
荷兮十　越人八

城下

鉄炮乃遠音ニ曇る卯月哉　野径
砂の小麦乃痩てはらはら　里東
西風にますほの小貝拾はせて　泥土
なかめある一川鱗ひかりより　乙州

暮いさゝかに二人つゝりたるみ給よ　恕誰

秋の露番れ袖をうち出れあり　珎碩

女房花ぬ紐ときかれかくれて　華

月の中に杉をく遊をうちする　野径

つよもさ川原にしるく見えと　里東

款乃杉のしきはつきや　泥土

馬よ百弥てきを下そく　乙州

一里こ越るゝ山乃下荊　恕誰

見えうまく岩屋よ星影を　泥土

拵れ世ハ泪をしくれに　里東

霜舟よ家擲の花女れさかさうれ　世径

まさ出のにつきく丁百の篠　乙州

月花を丞屋をよんでゐる姉つせ　珎碩

賛美院乃垣ときかり早蕨　恕誰

人ニ抵まする餅てもおきすれば　里東

生きも過れ垣手結わいす　孫杉

乃みに折て居酒の荒の一曝　乙州

古きをくちきんのうゐ禅舎　世径

時しも百姓まても烏帽子みて　恕誰

配所をうかぶよ供御乃蛤　泥土

夫婦いかまいハ船越見の活やかろん　珎碩

連も力を皆さて死ちらの　里東

かしら風の大毘寺縄よ吹遊し　世径

與乃こゝろに関けへと　乙州

鐲剛き歎莫ふちいさき佐々巻て　泥土
夕也の朝ふ葉倉與れを　恕雑
看経乃嗽（せき）ま漏らさし喚気声　里東
四十々老売うつくしき際　孫碩
髪くせふ袖乃紙を練重て　乙刎
癖を細糸ふあ久て鳴らし　野径
杉村の花八ふ菜ま菖蒲つき　恕雑
田たん片渇ま苗乃とりさし　泥土

野径　六　里東　六　泥土　六
乙刎　六　恕誰　六　珎碩　五
筆　一

雑

亀の甲ふるえ時を鳴らせん　乙刎
咋牛寰ふ風乃ふくまゝも　珎碩
百姓乃来郷仕まふ私のふえて　里東
小寄おくろ中る川くるんの縄　探志
稲穂く奥の間乃紙蘇の舟　昌房
帰路荷くそゝ中る也蜆　正秀
秋菽の中ゆ露まちゝう紅帰らる荒　及肩
風呂丸加減乃声との減より　毋径
営乃事さまま命く鳴らし　二嘯
宮の中くなるかなきこの塵　乙刎
初花ふ雛の虫橋て指掛らく　珎双

んのそこに息をあらしけり　里東
派の葉乃香に吹そて氣し笛の夜　採志
寐られ起て廿八宿帰　昌房
講入の中花ゆく関ふり　正秀
まるゝ上京もつゆるやくさむ　及肩
藪に咲るる萩の町屋は今年茶　遊徑
雀を荷ふ篭乃だく鳴き　二嘯
うきを思ふ日そ入みなき菊弁きて　乙州
銚にかひなし姫客の出こぬる　珍碩
済くうさ本錦袷の祢すとも　里東
擯ほきされてゑらさあまりの　採志
暗かりに葉猪乃下をきやし付　昌房

借ゐるを帰る乱まかり白　正秀
いさきゝる鐘一節に夜寒　及肩
あ波かまる鯉棚乃秋　野徑
にかくも切紙の織手は懐で　二嘯
さかが乃岸ふたたの波月　乙州
吟行に味のつくてを嫉さ　珍碩
蟋蟀かうちハ泣ま一指結る　里東
月をめでゝは禿のうそにとさせて　採志
さればさかしくらきられ上侍　昌房
春うしうふ城縁にて縫にさけ　正秀
縄を結る寺出ん上荻　及肩
花乃比道の日影にうれていちて　遊徑

さゝらに打し獅子のまち風　二蜀

乙州　四　孫碩　仝　里東　曰

椞志　仝　昌房　仝　正秀　仝

及肩　仝　野径　仝　二嘯　仝

田野

鷹道や苗代時乃角大師　正秀

明ぼのゝ霞む神嵐の影　孫双

翁ふとのやゝかた鳴しまの雲　仝

かゆぬ粉のしさ門口の文字　秀

月影に利休乃花を鼻に鍛　仝

宿し芋をとりてなりけり　碩

虫まで皆つく桃しき鳴る也　秀

行足しの木履よし始る　碩

整え文を百もあまりて尽に給ふ　秀

かゝさくもくり能の侍　碩

須に八すさ相ふ自由かる豆盛に　秀

孤の影る弓かねと走る　碩

月ぬる師走れ空の銀河　秀

寒理に昇る猪も進きん　双

ものぬして大脇指もすられて　秀

稲あるまも縁談る智の叔　碩

江戸酒を花咲かぬ寒く　秀

あいの山彈きる入塚　仝

雲雀啼里は厩糞かき散し　翁

火を吹くて居る禅門の祖父　秀

本堂ハ十すき荒壁のあらし組　翁

羅綾の袂志ほりかぬ　秀

歯を痛人の姿を絵に書て　翁

薄雪こまむすしき痩たり　秀

葉媛乃宮へ参る婦を接とき　碩

口上果ぬにさまれ时宜　秀

名にゆきつ小刹つ話ふ草袴　碩

秋入神る肥後乃隈本　秀

鍛白髪も見て月見る役者か　翁

す布子ひしろ歌はえくりとり　秀

沢山に元めし空吃られて　翁

呼あふまくらも猫を借る寸　秀

子規流小人町乃雨あつり　翁

やし風の机来の首萌立　秀

蕎菜ニ雲絡挟つる書あつて　碩

かゝる痛にまゆる二の草ろふ　秀

正秀　十九　珎碩　十七

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常に芭蕉の軒に行
かよひ瓦乃窓をひらき心の泉をくミしりて十あまりなく
乃文字の師風をうけてあへて事や哥ふ路のあとを問き
おかせる秋この二三子に序に行て炭桶にのりし炭をおこして問ふ
菴主これに口ずさみて宋人の手亀(かゞ)らずといへる薬を思ひ
なりんと志のひ筆に燠(ヲキ)のさかやかなるを堅にたとへて槌に
成して金屋乃雲の古さまに哉と責りなりおもひ
いつる声乃いろにて耳に入ゆくもうつるこのあ鶯乃あ
とものゝ翠のすりけるかしやこれをおもひ立姜の白
乃くつと出しより秋乃月よかしらかさ婦けいしや終り
筆なりて責にかゝりの二十あまりかゝると百人一首とひ

きつんとゝみ甘露乃経を出やうり打さかれハ又くしちき炭
の無佛みしらりてしる鄙言をかく併持るをりハ
詩乃正しき哉といへる五の代乃声あるハ世ちうの意こ乃道
そひまハ阿りしねと御乃日に須きかるみもあらし合龍とより
西あり(つ)るてすあらしひしく芭蕉旅行乃そ遅りり
やいうれふしてを抄めく再会乃哥を整へけり此ぶの集の
すりふ阿くこの毛くあり乃歌きうちさ桶乃あとれよりぬき
炭乃始ることをうちまけつるに炭あひをといへる
ハ挑也たりとも桃ちらる絵小子吟をりてよしと知らひ
うるすや此志らうを先そ媒と郷とりこのゐかて宜ら
序をてよと志捨てけうれぬをけるをとうかへ道の初を
杉かつに鄙言をのつゝしひに市りさふに炎をつかふる褚へなる八

わらしうしとならをたくむ
元禄七乃年夏閏さつき初三乃日　素龍書

むめがゝにのつと日乃出る山路かな　芭蕉
処々に雉子乃啼たつ　野坡
家普請を春のてすきにとり付て　仝
上乃たよりにあがる米乃直　芭蕉
宵乃内ばらばらとせし月の雲　仝
藪越はなすあきのさびしき　野坡
御頭へ菊もらはるゝめいわくは　野坡
娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉

奈良がよひおなじつらなる細基手　野坡
ことしは雨乃ふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸　野坡
ひたといひ出すお袋乃事　芭蕉
終宵尼の持病を押へける　野坡
こんにやくばかりのこる名月　芭蕉
はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡
露を相手に居合ひとぬき　芭蕉
町衆乃つらりと酔て花乃陰　野坡
門で押るゝ壬生乃念仏　芭蕉
東風々に糞乃いきれを吹まはし　仝
たゞ居るまゝに肱をわづらふ　野坡

江戸乃左右むかひ乃亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡
方々に十夜乃内乃かね乃音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房乃おやこ振舞て　芭蕉
又このはるも済ぬ牢人　野坡
法印乃湯治を送る花さかり　芭蕉
なは手を下りて青麦の出来　野坡
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
魚に喰あくはまの雑炊　芭蕉

千とり啼一夜〳〵に寒うなり　野坡
未進乃高乃はてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野坡
屏風の陰にみゆるくはし盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花さかり　嵐雪
あさみや苣に雀鮨もる　利牛
片道は春の小坂乃かたまりて　野坡
外をざく〳〵に囲ふ相撲場　嵐雪
細〳〵と朔日ころの宵乃月　利牛
早稲も晩稲もおなじに知る　野坡

ウ
泥染を長き流にのばすらん　嵐雪
あちこちすれて昼せんどころ　利牛
擂うつ音を嫁を悔まる所　野坡
てうしつく冬籠るこのわり　嵐雪
足谷乃かちハ男緒甲護法　利牛
五百のかけを二度に取なり　野坡
網ぬすまれいゞの絶ある富山人　嵐雪
人のさかしぬ雲見むなり　利牛
新役乃難を下せて息の入て　野坡
飯まへ中する芋を芳月　嵐雪
漸と雨降やみて秋の風　利牛
鶉飛みてハ又餅つく　野坡

名
喜六乃ゆるしを嘆墨ぬりて　嵐雪
抱揚る子の小役をとふ　利牛
くりくりと河内乃蒟掘送る盆　野坡
心みるとし蕎乃せん多く　嵐雪
聟うまく娘の世さる嫁まゐり　利牛
ことしし乃あれハ何も寝かぬ　野坡
垂綿の絹て流れをとさするん　嵐雪
叶うれ地の小島とるまる　利牛
泰乃穂ハ打られ風に吹倒逢　野坡
高場乃喧嘩の後まも月　嵐雪
老ハおもふし酔て人になる　利牛
今年居やせんくらのほとけ　野坡

ウ
賣手もうちつてつれたちたる女郎　嵐雪
ほろりしと中ゐのふり出し　利牛
縁舎の後きかせん走られる　野坡
うしさ雲乃声れぬ細引　嵐雪
杖ある母をうしめたき雲乃け　利牛
まさらひ残る正月の餅　野坡

ふか川にまかりて

空豆乃花さきにけり麦の縁　孤屋
昼の水鶏のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨ふりて　岱水
そつとのぞけば酒の最中　利牛

寝所に誰もねられぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀のころぶ秋風　孤屋
あかうしん鶺乃下より鳴出して　利牛
晩の仕事乃工まかし　岱水
鱒を生ながらおかしくて　孤屋
綿摘のりしくまつりて文をよむ　芭蕉
風細う夜明からの鳥啼わたり　岱水
家の葉かれさ紅をさへに行　利牛
鍬汁にけふ奉よりまくたなりて　芭蕉
菜の雲の茎をとさけて壹ヶ出し　孤屋
このまへハよしやう茶の鉢して　利牛
ようれし柳波今ぶ寂しそて　岱水

宮乃後吹てうつしぬる朧月　孤屋
ふらん鬼々もの種まひ取る　芭蕉
不断の者隣て中乃やうにかたまり　岱水
名
えんりよ掃をとよくあかしれ　利牛
涙するのひとつれ業しぬちにす　芭蕉
墨つけれずるかしらを取める　孤屋
茶のましんをとらんて利れ深き　利牛
宮を遠ざくる撚る長屋　岱水
今のあれまれ屋まをさまる　孤屋
手責まんとはしれまり　芭蕉
急ぎて担夫の立つきのもとさま　岱水
娯悪ずしぬ七夕乃照り　利牛

名月のまんれ合せる祭芹畑　芭蕉
ゆるくいりて若よ薦鮎　孤屋
ウ
このころを宿の通りもすまふ　利牛
山乃根際乃恋れかなり　岱水
まぬ雲かいよく風の吹出ん　孤屋
晒乃よい日とりり精霊　利牛
花さかりて女子たちりがつき合て　芭蕉
余乃ちきさりれ堇多ん成　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛

各九句

百韻

子は裸父はてゝれで早苗舟　利牛
岸のいばらの真白にさく　野坡
雨あがり珠数懸鳩の鳴出して　孤屋
与力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿竹に茶色の紬たぐりよせ　野坡
こるゝ離れくわかく人数　孤屋
蒼乃丸干葉ふ乃茄汁わるくなき　利牛
掃も淀のしゝ檀ちるらし　野坡
ウ　ぢしめきを此弁てより出かはりほあつ　孤屋
坊さんなれてやくりに年ひ　利牛
松坂や矢川へこいれる通り　野坡
吟すし膝もつまき関乃表　孤屋

十二三弁乃衣裳乃おもくるし　利牛
本堂はしほまだほとらく　野坡
日乃あたる方はあかるき竹乃色　孤屋
只奇麗なは白すくな　利牛
近江路乃うらさき飼を取て　野坡
天氣乃桐ま二ゝ肉乃照　孤屋
鮮あまうまれおさむかひに漬　利牛
棕の実落る屋根をさるなし　野坡
帯貴乃庵立連立来たり　孤屋
法就依ころの人気をそゝらく　利牛
ほのかしと二つる気乃いはぬひ生　野坡
ほめらし何へ乃緒まこそあらく　孤屋

ない袖を娘りくみんなりを物思ひ　利牛
舞羽の糸もよれつくる縁　野坡
浪しよ西武士の荷のつゐゑ　孤屋
尚きれいなるより今日は又剃　利牛
切蟣(ウジ)の喰倒したる植たばこ　野坡
くはらりと納戸を仕廻ふ広庭　孤屋
瘧日をまぎらかさんと待ころ　利牛
煮てもけふる小鍋の重さ　野坡
つまあれの名をよびしかれ唯念仏　孤屋
ともよりの書出さき年の暮　利牛
これの身様子負ける古柱　野坡
なひまはれ走れあまるこつてん　孤屋

ひつそりと盆は過たる浄土寺　利牛
戸てからくみし水風呂をや孫　野坡
伐透れ柳と椿のすぢあひて　孤屋
赤ひ小宮はあたらしき内　利牛
濱とは宿の男は荷をとらえ　野坡
隙き比丘尼乃諷乃寒さよ　孤屋
餘橋れ的をと遠し費えて　利牛
天満の状をと又志れけり　野坡
廣袖をうへにひつぱる舩乃宿　孤屋
むく紀ふしてふる歓害　利牛
燃さる薪を尻ゐま精くへて　野坡
十日五女乃ふりまりしてゐ　孤屋

三

内ゝ花はかきにけ蝶の頭そり　利牛

弦打颪海雲とる也　孤屋

機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡

小豆売る小家乃宿の静し　利牛

福嶋に賤ゝる兄を呼出て　孤屋

摺乃様うけを念入てこれは　野坡

麦畑の替地に渡る傍示杭　利牛

売手も志られ新段の歩年　孤屋

拙毎も子の粘になれをたゝれさふ　野坡

又此肩の古袈いしくを　利牛

妓王寺まゐりへ上れる二季読　孤屋

冬ざれを冬んへのく舞しまかり　野坡

薄雲乃さまゟれ初るを渡出し　利牛

一つくたりに鶴乃雲揚　孤屋

能仕に藪引ちらする紙乃膚　野坡

なめすまとる衆乃深あらひ　利牛

めを縫く安部に憚る駿の多　孤屋

又たのみして笑濃たよりきく　野坡

かくまされ中の足目をまつらく　利牛

入来る人手味噌豆を出ん　孤屋

まちこちに赤練給乃諸田川　野坡

此茶屋乃みゆる宿乃きれ作垣　利牛

ほとしとさんとほとゝす雲ちきれ　孤屋

おち葉に緑まうしる熱けし　野坡

寺乃内引越て居る櫻哉　利牛

尻軽にする返事よく〳〵　孤屋

おちつかぬかなへし時乃占の書　野坡

入舟つく月乃六日　利牛

拭立てお上の敷居ひかるなり　孤屋

出云つのる細うちうひ　野坡

名

大かたのあたりに畑乃かみのけて　利牛

何年菩提しらぬ栃乃木　孤屋

嵯峨まで同心乃おくと姪　野坡

丸九十日湿をわづらふ　利牛

投打もならぬ立中にやつさし　孤屋

足なし棊盤よそへ借に来る　野坡

里離れ竹の抜引乃あらつおく　利牛

やさしさのものを嫁の襟かけと　孤屋

きまりうる絹白衣の精進者　野坡

うんちも果てる八まん宮　利牛

丁寧に仙臺俵乃口かゝり　孤屋

浙江ゝ海て土となる筋　野坡

冬月に醫者の名をおぼえけり　利牛

包て庵る鮭乃やきもの　孤屋

名ウ

定免を今年は風に欲ぶかで　野坡

もたずや仕事もならぬ押よせて　利牛

罪瘡の疼老木をとらさうり　孤屋

歩丸ぶりてこゆる逢坂　野坡

減もせぬ淡路屋乃こゝろさし　利牛

門違ひ町乃桐油　孤屋

彼岸ゟつゝき乃花の咲こゝろ　野坡

こくなきうらおもしろき夫　桃隣

春之部　発句

立春

蓬莱にきかばや伊勢乃初便　芭蕉

あら玉やよのなかきゝつりの松　濁子

みちのくのけふ関越ん箱の海　枳風

京

はつ春や家に譲りの太刀はかん　去来

膳所

ゐさらひ供もつゝましき餅乃妻　正秀

大坂

いそかしき春を雀のかきばかま　洒堂

鶯や竹の古葉のにほひの椽の先　岱水

猪いきて門徒坊主の梅の花　沾圃

月下にも梅乃匂や年男　孤屋

初日影堂立もつれて夜明けしや　利牛

若松や親のなく成る治まりに　野坡

梅

梅一本つましく咲ぬ家の内　露沾

むめ咲や細乃枝の内より　曲翠

むめかゝに追ひもとさるゝ寒さかな　支考

富士のすそ野をとらへこそ

伊賀

むめちるや糸屑光る日乃匂ひ　土芳

梅咲て湯屋の山明迄有けり　利牛
赤みその口を明けりむめの花　游刀
みそなしに咲ありけり梅の花　野坡
紅梅を娘すまする妻戸哉　杉風

拙者にとしの七くさを[illegible]

[illegible]も[illegible]白つる[illegible]　其角
七草や粧ひしかけて切刻　野坡
うちむれて若菜摘野ゝ晴かゝし　仙杖

送りの文かきしに

朧月一足づゝもわかれかな　去来
大はらや蝶の出てまふ朧月　信 丈草
おぼろ月[illegible]　仙化

涼川のほとり

出来さや[illegible]之より一　利牛
十五日立や睦月の古手賣　大阪 之道
猫の恋初手から啼て哀也　野坡
ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉　其角

鶯

うくひすにほうと息する朝哉　嵐雪
鶯に業をしへん夢の文　子珊
うくひすの声のまれ[illegible]花の乱　桃隣
うくひすや門はたまたま豆腐賣　野坡
鶯の一聲も念を入にけり　利牛

柳

こねりをへらして植し柳かな　沾圃
隣まごしたえの手ならひく柳かな　素龍
又人へうつりて去らし柳かな　野坡
せきれいの尾ハ八ッ尺さつ柳かな　一風
町なかへ去るゝ宿乃柳かな　利牛
傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

土さらに籠にちり込椿かな　孤屋
枝もし伐られね宿を椿かな　湖春
念のくみつゝてほむ椿哉　曲翠
藪にまぎれみせる赤つばき　嵐雪
鶯のねも啼ん宿の赤椿　支考

ならよ掃除せぬうら椿散ほどの　野坡

花

うへの花見にまかりしに人く
幕打さはぎものゝ音小うたの声さまざま
なりけるかたハらの松かげをたのみて
四つごきのそろはぬ花見心哉　芭蕉
むつかしや何て花見よ大様じ　杉風
うらくと寒くハ花見さいふ
何かしの娘の花見かな待りて　夫州
中下もそれ相應乃花見かな　素龍
出るや白きのしらを実にけり　吉木
頬めし乃湯を膝や庭の花　孤屋

あくるとし云茶人の当月乃九ツさかり　荊口
たふれても梅のころく　いきる事なしけり　斜嶺
柳の髪おとすゆるり車や花の中　北枝
牡丹まつく人まや花をはさのくら　湖春
あらけなと花は五絃のさくらかな　其角
むかしも毛虫になりし家桜　嵐雪
やまぶきのちるかや小川乃水車　大津あま 智月
老僧も袈裟かつきゐる花見かな　大坂 之道
浮毎も猿教ゆる遊女かな　游刀
山桜小川飛こえおなごかな　越前福井 普全
昆布よしやあさのつく庫裏坊さま　利牛
おちつきさき鳥やまかせや桜かり　仝

折々る桜てふつや座所　孤屋
みふらずをあそふ日なくて花見人かな　野坡
倉乃時みなあつまるや山さくら　仝

上巳

竿竹に川乃なかれや汐干かた　沾徳
貝ふれて雲るやひなの桃の花　桃隣
うつくしの緋ぞいつれる衣の雛　其角
畏乃子に餅をはなるるもひなかな　ミの 如行
日半路をてられて来るや桃の花　野坡
麻の種毎年踏て森の花　利牛
藪垣やこる乃魚かくすもゝの花　孤屋
青柳乃泥にしたるる汐干かな　芭蕉

春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏　芭蕉

若菜つむつしの葉や二三本　子珊

ほろりしとうみ旅門のつまなみ　怒誰

名乃折やけ乃く堤や風乃末　猿雖

さまおもきさ春風乃麦乃嵐かな　仙華

旅行

浅茶場を塀より門をすゝれれは　野坡

此集いまた半なるころは孤屋旅立
するにつき所まて見送りて

雲雨をまつおちておもしろき　野坡

梅さくら姉と身をそゝきけり　利牛

夏部之発句

首夏

塩うちも乃雲浅き見え衣かへ　嵐雪

衣かへ十日はやくや思ひけり　野坡

紙子ぬく旅ねはせいし衣更　杉風

生よりやれき綿やとるへ　雪芝

帯のあとけさよはれの薄かな　子珊

麻衣の膝の庵白し衣かえ　利牛

うの花

卯の花やくらき柳の及ごし　芭蕉

卯の花の絶間たゝかん闇の門　去来

旅行

うの花に芦毛の馬の夜明哉　許六
卯の花に扣ありけりやかつけ　支考
一郎しらん
棹の歌にやすらふ涼しげる舟　沾圃
葉宮紙池に蓮ある古居哉　素堂
うくひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

ほとゝぎす二階はねらはれきれ　桃隣
ほとゝぎす一二の橋の夜明かな　杉角
竹焼と身まま衣にせんほとゝぎす　岱雪
挑灯の空に詮なしほとゝぎす　杉風
あちこちや菜摘む笑や郭公　芭蕉

青雲や舟ながしやる子規　素堂
時鳥啼し風が雨になる　利牛
子規顔の出されぬ格子哉　野坡

麦

楝ちるに麦穂いやしや鄙じり　三の潮口
麦の穂と青みそよぐや筑波山　千川
麦稗の出穂や一葉れ蛍とぶ　許六
翁乃礫川さきまで送りて
刈こみし麦乃白ひや宮の月　利牛
おなじ時に
麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡
おなじくこの紙

浦風やむらがる蠅のはなれぎは　曲水

端午

てゝく菖蒲や傘に付たる小人形　其角

さゝぬ鎗くみてや侍つぼね風の色　大坂 洒堂

五月まて水すみてあるあやめ哉　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みをとりや菖蒲の胃より甲冑　仙花

帷子のまへぬきさ鋤る袷かな　素龍

夏籠

並松をみつゝて町のはつさかな　卧高

枯柴まきて雲ふかし見えすかすあ　斜嵐

二三畫鎖ぬ塊ともあつさかな　兼好 馬町

あけ山の力及ばぬあつさかな　猿雖

するが地や花橘も茶の匂ひ　芭蕉

此句は嶋田より尺牘にあり

五月雨

はれやらて降りくる鐘の九本橋　素龍

五月雨の色やよと川大和川　桃隣

さみだれに小鮒をにぎる子供かな　野坡

夕月の雨や露もかゝる松の下　嵐蘭

この句は桃隣より出されしね　惟然

涼

川中の根木によろこぶ涼み哉　芭蕉

月影はうごく夜半や菊の露　うね
涼しさよ湯まですゞしき竹の露　外七
川竹をさはりてみればすゞしさよ　探芝
清風をすゞしくれて涼し五位が聲　智月
すゞしさを忘れし柄杓の雫かな　凡峯
すゞしさや湖の上ればこそ人へ　去来
夕すゞみ美しき石のあたりけり　野坡
三ヶ月の落ちてすむ哉　素堂
題しらず
橋や見る家机のあるところ　杉風
鷹は背むしや砂茸すゞき　正秀
世の中や蓮に鳥の仕事哉　里東

早乙女の手もとにうるはしき葉飯かな　嵐雪
木曾路にて
山吹も巴も出る田植かな　許六
影うつる塵手の間にはぬ花の露　智月
夕ぐれの山やくもすみぬ生るゝ見　小覲
峠の内をさらさせてさゞの葉　乙州
言ふもの両年に忍ぶかりの葉　丈艸
堂見る花の夕や夕の夏　仙花
一いきれ蝶もうなつくわらの葉　楚舟
あつかる蟬も落る水の　此残香
椿の手よりまゝしく茄子かな　為有
園青く行所やあらき　怒風

けふしとハ鶴は栖や雲の峯　蓼雨

一枚をすけ出す竹のわかれ哉　仙花

竹乃子や見え蕾くさき乃こゝ月　嵐雪

さるへき人　僕を酒とれしむるをかなく

飛せてそ蹴せしむ志くれ成る人

それをよく知てあしきはかりて

名あるかたりと見せてあれ世ふれ

それ汗をかきなく

酒は名乃つくあつさ哉　利牛

ある人の別業にいさなわれ出る事有

て物さりしさ外のこさをたちぬ出て

ゆ雲とねくおもみる文夜哉　我汝

穐之部

名月

秋のあはれはふかくの色ありて月を詠る時節の序とそいふ

名月やつかへても居る萩一もと　游夫

名月や樫見えまかん蓑の虚　玄来

家買てことしも月の初る秋　荷兮

名月や滝の落来る森の嶋　洒堂

松陰や生ぬ揚平に乃月見　里東

ゆふ汐乃橋乃ひくさよ今宵月　利牛

何こかつかれ未もさしき夜の月　其角

むさしの中秋のさそひしあそひける

望峯ノ不盡筑波を

晴月や不二みぬるとする名町　素龍

七夕

笹のはに結付てやほしむかへ　其角

星合まみえぬやかやの縁（へり）　孤屋

七夕やふりかかりたるあまの川　嵐雪

盂蘭盆

こうきりはうかうに新せむまつり　洒堂

踊るべきほどには酔て盆の月　江戸 李由

盆の月ねぶかと門をさしきたり　野坡

胡鳥

同国

胡鳥や墓を振かへる門の垣　芭蕉

朝鳥や月備出る門の垣　利合

一しきり鳴てやみけり柳かな　湘春

秋虫

手よれと聲ハうつろへきえて　大津 智月

悔しくも人のとまれやきりぎりす　大中

蟷螂のりんとしてなく草の上　さか 乃有

こうろきや寝覚て返す猪の上　孤屋

雁

友雁乃帰をみるに雁なりき　車来

人のみとめぬようにて
雁の文字や硯の朝（カタ）　素龍

旅行のちよ

近江路やすがきに雁の声　土芳

草花

うら枯乃萩や夜より秋の花　桃隣

花すゝきこちらへなびくや村すゝめ　野竜

行暮乃萩や刈かん稲の端　猿雛

芦乃穂や良揺揚る葉さしる
なまえはささく　支中

芦乃ほまよ暮らし川ゝるや宮の緒　玄来

山中の葺萩をとみて

葺萩や奥の先ふかるぬるさ　其角

園菊

菊畑おくある音よりかり弐　杉風

損菊も名あて咲出ん九月の霜　桃隣

秋挂抽

柳のあるなどとるもとの跡ところ　利牛

茄霊や谷まなくて龍の甲　祐甫

秋風や茄子乃畝のあらわるゝ　木白

篝ま手く窓まちよく帰の糀　孤屋

とうくらしの名など葡萄かりしよの宮ハ
それら治世南そんまくひさしうじゆへ宮や
未詳あらつき天のそきそうし又八ツなり
あてゆるハそのゝかとちをそのゆる人て乃
わくあうひをく待しゝあなへしこなやさし
うしぬ名月八汝うむ乎れ宿乃みてゝあれハ
天資自然の理さしりし順む入てれる

嵐峡とうたやた石山ハよめせられたく竹林
のうしのさまおもるハ主られ仕合之と云れハ
すりうちのきられそこ坐けり乃つくへ主ろうれて
まで乃そられ二階のつきま起りしのひうけを
とのあるあしとあやうくみを待るを錦魚の
そうあきなくひすハされかりく押りわさと大なるハ
うる紙つり数の子さとしおくようしつくよ
てりん木橋のまとうつきをみさるあとあり
金竜山乃とききりと見え出されなかくハ
存之夏鼓乃比紅葉乃色をみするると
秦台の頂上とせりうくハ定とある人
此舟よりての海きりみちのあかくうの

小序まことに一あられてあんちうまとと
ひとつみのりしを石山せし事侍りと只ハ
いやしめられきみもあらんあらしいまハその
ハくも此地をさりつれそいよく乾をも
よあむへられうきがもみちへられと
小序を志るのよ

石山を経す根こきや磨うし
艶しられ　仙坡

あけ横取あらし嫌や秋のうらのき　岩雪

手風おれ下や葉山字好みの庭　文草

礁ひとりゆき流豹乃白ひとの　酒堂

秋のられいよくうくあるぞ花　萩竹

葎やや葵草も見へ八嫌し色　利合
夕良乃汁ハ秋しる初(?)ぞかな　支考
ものゝ秋ハ風もかくもなかりけり　小枝
秋風に蟷螂やあれたる池の上　僧 信之
庵了乃所秘らし月乃雲　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角
市中や木の葉も落て薄ほこり　桃隣
木枯乃磯にさゝ(?)てる蜑の声　芭蕉
振舞や薪(?)沢山(?)に来てこぼれ　支梁
旅の?乃きれめや小松原　斜嶺

刈萱は紐(?)乃乱れ(?)て崔(?)かな　利実
凩は萩の上ゆく小宮(?)かな　紗香
初霜や猫乃毛も立寝(?)かな　樊舟
凩や鱗(?)ものけき猫乃面　八桑
かくれ山に(?)訪ぬ　桃隣
木枯れ根にすがり付く榎(?)かな　桃隣
笋(?)月にかね乃簪(?)残乃さむさかな　遊刀

時雨

茅舎乃後へらしらり初時雨　荊口
見あかり沖の時雨れりところ　丈艸
芭蕉翁をおくの苔庭にまかせて
もし此布と雲り時雨(?)の(?)庵　斜嶺

去年とあれ(?)も茂しこれまで八　許六
　鏡ねのうら
小夜嵐とかりの向を枕やらぬ　野坡
　大根引といふ事を
鞍壺に小坊主乗るや大根引　芭蕉
鞍壺をとしとれぞ々あらそ大根引　野坡
神送荒るゝ雲月の　大根　洒堂
　洗むさ　をりのえみをえまて
人参の衣すぐるさむさ八　野坡
このむを先　様判も洗むさ小　示蜂
蓼喜部よ　吸物あまきこゝきさ八　利牛

足もともまつくらでさうしみの月　我眉
奥庭や　葉うち上て冬乃月　里东
太の二日よふり川の底くをつれけれ
他国よりの惜乃そしよみつるかみく
　今宵まひしなし

雪

まつ白ふとあかりを執ておなかり　野坡
初雪の八つくるやうるの鼻をうら　利牛
きん川あや　塚の山朋道の堂れ上　買山
雲の日よ唐傘(カサフ)を　鷦鷯(ミソサザイ)　修々
雪乃日やうみすやうらみつゝ梅　猿雖
冬の衣　飯ほ手ちく

杉のうへは百舌鳴けり夜の雨の路　支考
朱の鞍や佐野へわたりの雪の駒　小枝
いつまでや先ゐる鹿の浮て寝る　許六
巻葉は横町さゝる雪の下　洒堂
海山の鳥啼しまる雪の上　乙州
江の舟や曲突に寒き雪の路　素龍

歌ふる

芽ぐさは縮にあし込柿舟かな　羽黒　呂丸
宮さ菊や鮓糠のしる白の端　芭蕉
淳門乃草の袋数尺十夜かな　許六
淋しさや続く乃盆ねむる村かな　智月
白魚のすゞき白かや杉の箸　之道

榾の火やあかつきかたは鳴ずる人　丈艸
庚申や七よはは大姪乃ねる虫籠　孫書
灌ぎ綿の縁能すんできく神楽　其角
あつ海に散るや雲の波の音　仝
まとまさき
蓮をとさき己の棚つる大工かな　芭蕉
猿舞はせとくる人代かな　万平
餅つきや元服させる家の主　野坡
山吹の咲に出たる姉の手かな　嵐雪
侍者や氷にましるかうの山　智月
茶箸
このもの文にかくしけり　杉風

そらまきぬ筆入もなり年の暮　李由
あらしなく鶯一羽としの暮　智月
鍋あさのけぶりしさよ年の暮　孤屋
としの瀬もちらしらん儀かな　猿雖
年の市ともふるき諸流ひ　野坡
芭蕉翁の旅寝わかれの年
いつたとえしてそのまま
凡そなく心やさしや年の内　嘉林
行年や多賀へまゐりし昨日の手　惟然

誹諧秋之部

秋の空尾上の杉に離れたり　其角
おもしろく一羽浮かるる鶴　孤屋
鷲の巣は偏掾る見ゆるく　仝
内か隠くに扉の門　其角
稲妻る手の火桶も薄きなり之　仝
つまひ落葉を丸きころもかな　孤屋
下京に宇治の糞舟さしうけて　仝
坊主の茶ふ蓑八おもしむ　其角
足軽の子守して居る八幡哉　孤屋
息吹へくも霍乱の針　其角
田の畔にて苗把投て置　孤屋
屋根ののきさむ綴るさの花　其角

い蛇乃川出しさんちうさ跡　孤屋
影ま柳さくらしね乃庭　其角
絵縄よ雛乃さかれハむかれく　孤屋
層れ下らう殘あるりなし　其角
要くく乃梅津桂乃花のみち　孤屋
むうしの子ありきのなせて道　其角
いさん沼なきさ分ものうら居　仝
冬乃縞乃あしらしき内　孤屋
夏草おふるまさられぬやなり　其角
あかとるて小袖いやいうれ　孤屋
まの豆家禄乃様も皆ちりて　其角
笛とさなりかり風呂をまり　孤屋

君こねえこりれ江貴乃あしなの　其角
稗と渡しの行灯つる鐘　孤屋
辛渡八雀のこりる秋乃くれ　其角
水より冷ね月乃雲ゆき　孤屋
紙帽しく染まくまより雨の残　其角
上塗なしま張く押く望　孤屋
小栗漆む行吉十世て宿なり　其角
くかもなくつく浮ぶ乃ふね　孤屋
孤屋旅くしま泊りの宿のあり場
今年江の春浦ありて吟行くぬ
其角　孤屋　各十六句

天野坡興行

居ちり捨ひあつめて葉むしの外　桃隣

とんそとまりの落る秋風　野坡

入月に秋をかんのうと寺借て　利牛

塚の前まくく相乃ひろのあれ　桃隣

洞童よりあ法めるるんてつゝむ也　野坡

つまふ降る雨乃つゐやむ　利牛

風の家見ゆるあん不もまうれ　桃隣

近くに居れと出合事さらぬ　野坡

まよりさ青と常往ねゆきし　利牛

いつよりさくい十月乃抜ち　桃隣

寺雨乃年寄藥まんきうえて　野坡

からよ家かしくし嫁乃仕合　利牛

ともあうと祖子に湿る衣とん　桃隣

瓶おをうりしる分大肉　野坡

附あらん家佛きこゆる堂の内　利牛

暗よう見まこよくおもぬし　桃隣

人の柚質ねて生家菜らち　野坡

むかやはもふあが念けり　利牛

より平北機に出る桶へとり並て　桃隣

むつむ乃あでとれかつんあれ　野坡

家近さ茶のく才雑そとすの　利牛

ゆるらしきつ燕つきもつく　桃隣

比ぶの茅をきくし秋の高　野坡

杉の木末に月のかたふく　利牛
同し事老の咄しのあくとくて　桃隣
たまされて又薪部屋に待　野坡
よいやうに我手に占を置てみる　利牛
ちやうしんされておくの商人　桃隣
帷子も肩にかゝらぬ暑さにて　野坡
京かゝ惣別家に入　利牛
名
焼物に組合たる富田鮒　桃隣
隙を盗んで今日も練てゐる　利牛
髪結も雪踏とする忍妻にて　野坡
先沖まではみゆる入舟　利牛
内へより葉の手を込て家の後　桃隣

ちりもせぬ風のふかぬもさむさき　野坡
秋の内花なる姉ゟ川をもて昂良　芭蕉
振売の肩にかゝれしはし澤　野坡
酒でハやかてつけるまゝ新　孤屋
東近江の挽の小節を削て　利牛
行たゞ山に月をとへりゐる　芭蕉
好物の鯏を押さぬあらの風　野坡
割木の安き国の為がね　芭蕉
網乃音近つきまみに聲かけて　利牛
早まくえしん二十八日　孤屋
ひきさるまきを辞単乃ちてゆく　芭蕉

淡気乃雪に雑談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹けして　孤屋
肩癖にはる湯屋の膏薬　利牛
上をきの干葉刻むもうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で恋する　芭蕉
絈買の七つさがりを音づれて　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
此嶋の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
砂に暖のうつる青草　野坡
新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帯しの水をあぶながり　野坡

平地の寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめよろこぶ　野坡
こそ〳〵と大晦日も風呂の口　孤屋
せゝなれてのむ状の継さき　利牛
中よくて傍輩合の借りする　野坡
[illegible]をとゝく祝せぬ内　芭蕉
風やみて秋の鴎の尻さがり　利牛
鯉の鳴子の綱をひかゆる　孤屋
ちらはらと米の揚場の行戻り　芭蕉

月見まゐりのつれの待兼く　野坡
そうそうの年寄乃三日中留守　孤屋
猫炭はちりをとらふ木の風　利牛

芭蕉　野坡　孤屋
利牛　各九句

雪の松おれ口みれば尚寒し　杉風
日の出るまへの赤き冬空　孤屋
下肴を一舟浜に買よせて　芭蕉
おいさくとよぶ太右の住　子珊
身にあまる風もふかし萩月秋　桃隣
粟とゝしれぬひろき畠地　利牛

ウ
鰌谷口井堤きれゝる秋乃水　岱水
篝らしらくく鐘をきれ夜くる　野坡
二三疋森ありし娘門の猿　子珊
るゝ乃荷担のさける下手の　沾圃
竹の皮雪踏に替る夜はまて　石菊
稲よ子のさに雨乃そらし　杉風
よみ割れ一人もみる浦の秋　野坡
めでゝも風のそよぐる笠色　利合
二月し乃肉をかゝらて旅大工　依々
背中への乃ける兜をとゝ八ゆる　桃隣
みるみしきれきふつく上よれちして　子珊
川うらとくよ小鮎いしける　石菊

名

紅白雲きれぐ～に(?)伸まき雉子か声　杉風

噂を入にねくとゆくりこそ(?)　岱水

曲物(?)りのふゑ(?)繕らと親とろう　孤屋

これ集めてハ世間さき積過白　芳(?)

勝負を控く信へそうり近　桃隣

りきつしりきく～く万代の花　信(?)

宮毎てあくバと自慢こきちらし　沾圃

とまりつりく火ともくて来る　子珊

又けさも佛の会く坊を悩　利牛

挨てうりしそし置てかく　杉風

大坂れ人ゝ生すれるその月　利合

路をそゝれて祖母の寺に入　野坡

まちぬる茄子の畠のかげかうり　子珊

吹れ小紙をてつるむせる声　利牛

新米をうらみく尽れハ坂に陰れ　芳(?)

七つのうねるにかゝる手にれ　杉風

恋の白あらそふつにくく　桃隣

男まうしりに蓮そろゆる　岱水

杉風 五　野坡 三　孤屋 二
沾圃 二　芭蕉 一　石菊 二
子珊 五　利合 二　桃鄰 四
信(?) 二　利牛 三　芳(?)良 二
岱水 三

撰者芭蕉門人
志太氏　野坡
小泉氏　孤屋
池田氏　利牛

猿蓑

晋其角序

俳諧の集つくる事古今にわたりて此道のおもて起べき時なれや幻術の第一としてその句に魂の入ざればゆめにゆめみるに似たるべし久しく世にとゞまり長く人にうつりて不変の変をしらしむ五徳はいふに及ばず心をこらすべきたしなみ也彼西行上人の骨にて人を作りたてゝ声はわれたる笛を吹やうになん侍ると申されけり人には成て侍れども五の声のわかれざるは反魂の法のおろそかに侍にやさればたましゐの入たらばアイウエヲよくひゞきていかならん吟声も出ぬべし只俳諧に魂の入たらむにこそとて我翁行脚のころ伊賀越しける山中にて猿に小蓑を着せて俳諧の神を入たまひければたちまち断腸のおもひを叫びけむあたに懼るべき幻術なりこれを元として此集をつくりたて猿みのとは名付申されける是が序もその心をとり魂を合せて去来凡兆のほしげなるにまかせて書

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

あれ聞けと時雨来る夜の鐘の声　其角

時雨きや並びかねたる魦舟　千那

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　僧 丈艸

鑓持の猶振たつるしぐれ哉　膳所 正秀

廣沢やひとり時雨るゝ沼太郎　史邦

舟人にぬかれて乗し時雨かな　尚白

伊賀の境に入て

なつかしや奈良の隣の一時雨　曾良

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　凡兆

馬かりて竹田の里や行しぐれ　大津 乙州

だまされし星の光や小夜時雨　羽紅

新田に稗殻煙るしぐれ哉　ぜゝ 昌房

いそがしや沖の時雨の真帆片帆　去来

こがらしや北斗の星のまへ　イガ 百歳

一いろも動く物なき霜夜かな　野水

淀ゆく

とくしゆれ何をよすがる舟の中　其角

帰花それにも志たん蓮咲し　同

禅寺の松の落葉や神無月　凡兆

百舌鳥の居る野中の杭よ十月　嵐蘭

こがらしや頬腫痛む人の顔　芭蕉

柿下けや篭れのくへの落まさ　凡兆

なのしふて

棹鹿のかさなり臥る枯野かな　イガ 土芳

渋柿をながめて通る十夜哉　ぜゝ 椐道

ちやのきや行て人に逢夫婦女　越人

このむしろ茶の花ゆつる村もなし　イガ 猿雖

古寺の簀子も青し冬がまへ　凡兆

八ツ物の喰ひ出し菜をと出かく

雛棚のあとさびしさや昼ごろり　支角

乙乃ごとき牡丹のなれのはての猫　伊勢 車来

草津

臨月もおかしく見ゆる乙乃かな　尚白

汁迄水にちらつく燕かな　弥碩

霜月朔旦

積もりかけて梅咲し赤柏　加賀 良品

冬寒き月は水をも釈迦も仏哉　羽州坂田 不玉

今は世を梅のむかしき寺子の嬉　尾張 且藁

花咲のころすみれ海気かな　去来

一夜しさむき姿や鶏千菜　伊勢 探丸

みちのくの多賀城のなまさい　尚白

茶湯しまつてさし目ふれ鯨ゆる音か　江戸 亀翁

岸の竈に手負の猪の倒れけり　凡兆

往つくね旅のころや蓮華塚　芭蕉

寝ころびや火燵番の入の門　其角

門前の小家もあそぶ卯の花　凡兆

木兎やめのひ切る世の箇　尾張 芥境

こつくは眠るをさされけり　伊勢 半残

貧交

ましりそ紙子の切を続けり　丈艸

浦風や巴をくづす群千鳥　曽良

あしろ城やそしらぬ削る歌あまる　去来

狼のあしく蹈消すや凌子等 史邦
斧門口の入江ふの行る千鳥かな 丈艸
いつ川をとこ雪ふまうれて鳴千鳥 千那
矢田の野や浦のなつれに鳴千鳥 凡兆
筏士の見かへる跡や鴨のかし 木節
水底を見てきた貝の小鴨かな 必等
見るうちに寝入てねる余吾の海 路通
死まうく探題んぐ鷺のうき 昌房
螺売よ首引つく冬の月 杉風
この冬や須磨のされてその月 其角
山茶花の蒲団くらやその旅 暮年
見かへるさへ旅人さかし為邦山 大津 智月

公羽の御地のあつき衾をあたへらるゝ紙子の思を
首出して川音見えるや紙衾 竹戸

題竹戸之衾

夏めたる見てねるもの紙衾 探丸
鳥のうけ鴛乃やるせなき氷かな 丈艸
身の川つきを盗み様も知らず綱代る
膝つきふかしこまりたる霰かな 史邦
楼桐の葉や冬枯ふあらしかな 野童
鵲乃棲りこけも霰かな 示蜂
呼くつれ雛見つくしぬあられかな 凡兆
こぞれ流るゝきや鮫鮑の生味ある 盡好

それ?や門に[illegible]人が跡　其角

初雪に鷹部屋のぞく朝朗　史邦

霜やけの手を吹てやる雪まろげ　羽紅

わぎも子が爪紅粉のこす雪まろげ　探丸

下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆

ながながと川一筋や雪の原　同

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し　芭蕉

草庵の留主をとひて

襄老八巻もあけて菴の雪　千角

雪の日に[illegible]　尾張　羽笠

[illegible]　長崎　卯七

ひつかけて行や雪吹のてしまござ　去来

青亜追悼

乳のみ子に世を渡したる師走かな　尚白

からさけも空也の痩も寒の内　芭蕉

[illegible]　乙州

一月は我に米かせはちたゝき　丈艸

住吉奉納

夜神楽や鼻息白し面の内　其角

[illegible]　加賀　須琢

あらしやう[illegible]　同　祐甫

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我は年忘　芭蕉

弱法師我門ゆるせ餅の札　其角

鼻紙のく行や若根をゆすく小松　長和

うす壁の一重は何か年の宿　去来

くれて行年のまうけや伊勢くまの　同

大としや手のをかれたる人ごゝろ　羽紅

やりくれて又やさむしろ歳の暮　千那

いねいねと人にいはれつ年の暮　路通

年のくれ破れ袴の幾くだり　杉風

夏

有明の面おこすやほとゝぎす　其角

夏かけし名月あつきすゞみ哉　木節

野を横に馬引むけよほとゝぎす　芭蕉

ほとゝぎすけふにかぎりて誰もなし　尚白

ほとゝぎす何もなき野の門ン構　凡兆

ひるもまたさびしいそふた閑古鳥　智月

蜀魄なくや木の間の角櫓　史邦

入あひのひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

ほとゝぎす瀧よりかみのわたりかな　丈草

心なき代官殿やほとゝぎす　去来

こひ死ば我塚でなけほとゝぎす　遊女 奥州

松嶋一見の時千鳥もかるや鶴の毛衣とよめりければ

松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

旅館庵せ侍く座右をとふを

若楓いろに額を一隅くま　膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

ゆかりなうつくしき灌仏哉　平角

素のくれぬ花を牡丹の陰かな　江戸 全峯

別僧

ちるとさのひやとさよ芥子花　越人

初音のまつる人やさとを見えむ　移竹

若葉に待られてすみあらしよわくそ　杜國

似合しきけしの二もと江戸の里　嵐蘭

井みずは深く清し杜若　半残

起出てあまされぬ鶏のこゑの

起しのひろこゑかきつばた　仙化

題去来之嵯峨落柿舎二句

豆植る畑も木部屋も名所かな　凡兆

破垣やわざと鹿子のかよひ道　曾良

南都旅店

猿のさけびなしみ鹿乃園の相　千那

淡海やきぬたよこしめ此樹の陰　尾張 露芝

豊國にて

竹の子の力を誰にたとゆへき　凡兆

あさけみすや畠濃に晝ちる　去来

たけのこや稚き時の絵のすさひ　芭蕉
藤は咲くさかりしこの頃　正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉
君か代や筑摩祭も鍋一ツ　越人

五月三日よしのゝ家にて

庭の芭蕉しげしなくてかける菖蒲かな　其角
粽結ふかた手にはさむ額髪　芭蕉
陽炎乃庵室にゆるし錦繍　江戸 岩翁
さくらしさん客人やよろこぶ　尚白

五月六日大坂にて亡児の墓を弔ひて

大坂やみぬよの夏の五十年　伊賀人 蝉吟

奥州高館にて

夏草や兵共か夢の跡　芭蕉
這出よかひやか下の蟾の声　同

此境はひわたるほとゝいへるもこゝにや

かたつふり角ふりわけよ須磨明石　同
ところゝ家に住てなかめける空　允兆
比叡麦は味なき物を月夜哉　木節
高き士の謂ひ出すありさつき雨　史邦

奥州名取の郡に入て中将実方の塚は
いつくにやと尋侍れは道より一里半
はかり左の方笠島といふ所にありと
教ゆふりつゝきたる五月雨いと侘しくて過る

あつくなるに

笠嶋やいづこさ月のぬかり道　芭蕉

大和紀行のさしゑに坂ありて行来の旅人をしらしめくもかもしめりれ料足つゝみし紙のはしに書つけ侍る

つくりもとてなし坂やあめのあと　去来

髪剃や一夜に金情て五月雨　凡兆

日の道や葵傾くさ月あめ　芭蕉

縫物や着もせでよごす五月雨　羽紅

七十余の老醫みまかりけるに身まかりけるによりてなげきの句
こゝろにてたく手向の…
ゆるその老醫いまこそかなしけれ

えもるる人よわすられぬ八幡宮に行ける
まかりして古来まれなる年をかさねしに
そこそあくゆかしくりけるに

六尺も力おとしや五月雨　其角

百姓も麦に取つく茶摘哥　去来

たゝらしきや茶の山したのまつれ　正秀

つかみあふ子共の長や麦畠　膳所 遊刀

孫を愛して

麦藁の家してやらん雨蛙　智月

麦出来て鰹迄喰ふ山家かな　江戸 花紅

しら川の関こえて

風流の初やおくの田植うた　芭蕉

出羽乃國上ときゝて

眉掃を面影にして紅粉の花　仝

法隆寺宝物南無仏の太子を拝む

御袴よりまかりて紅粉の花　千那

田の畝に至つてしかり鶯の声　イカ 万乎

猿丸曲水に橋かけて

鶯や吹はらはれて鳩の声　去来

芳田乃鶯の二句

鶯の旅や千代経る鶯の音　丸兆

ほとゝぎす鶯の声つれ　芭蕉

三熊野へ渡て鶯の母

鶯やこてなきつゝき八果尾谷　長崎 卯七

あさがほに鶏とせりあふねむり哉　尚白

草むしや百合をすくとれの色　半残

病後

雲雀や水しらずして百合かな　大坂 何処

もの見や家より先る百合の花　乙州

娘節句を祝ひて

子やなりんこを百の母も坂の姥に　嵐蘭

餞別

立さまや駕籠を送らぬ旅の宿　膳所 里東

ろとく旅人にまかれて

まつ吉野の花はいまかれけして

みよしのを春の雲より花の吹雪　其角

隙明や蚤の出て行耳の穴　丈艸

下闇や地虫ながらの蝉の聲　嵐雪

播磨
客ぶりや居處かゆる蝉のこゑ　探志

頓てしぬけしきハみえず蝉の聲　芭蕉

伊賀
ゑきさや盲麻刈るゝあとの雨　槐市

渡りかけて藻の花のぞく流哉　凡兆

舟引の妻の唱哥か合歓の花　千那

白雨や鐘きゝはづす日の夕　史邦

素堂之蓮池遊

白雨や蓮一枚の捨あたま　嵐蘭

日焼田や時々つらく鳴蛙　乙州

日の暑さ盥の底の蠛かな　凡兆

水無月も鼻つきあはす数寄屋哉　同

日の岡やこがれて暑き牛の舌　正秀

ねく暑し離るれハ髪の露　木節

ちねんこの藪ぬく風をあつらへり　野童

夕顔によばれてつらき暑さ哉　羽紅

江戸
青草も湯入ならんあつさ哉　巴山

千子が身まかりけるをきゝて
みのゝ国より去来がもとへ申つかはし侍ける

なき人の小袖も今や土用干　芭蕉

水無月や朝めしくはぬ夕すゞみ　嵐蘭

すゞしくに稲葉ハ涼し夕へかな　宗次

まくらしけや汐草つゝむ流れ也　凡兆

唇に墨つく児のすゞみかな　千那
月鉾や児の額の薄粧　曾良
夕ぐれや屼並びたる雲のみね　去来
　もし知て浴に入く
雲の峰今のは比叡に似たるかな　大坂　之道

秌

穐風や蓮をちらして花一ツ　不知　漢人
　此句東武にありきこて手すり素堂ゟ
かつくりとぬけ初る歯や秋の風　杉風
芭蕉葉は何になれとや秌の風　路通
人に似て猿も手を組秋のくれ　珍碩
加賀乃全昌寺に宿りて
終宵秋風きくや裏の山　曾良
芦の葉や鷺の寝ぬ夜を秌の風　江戸　山川
あさ露や鬱金畠の秋の風　凡兆
[illegible]猿の[illegible]あかり　去来
大比叡や[illegible]　野童
三葉ちりて跡はかれ木や桐の苗　凡兆
文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉
合歓の木の葉越もいとへ星のかげ　仝
七夕やあまりいそがばころぶべし　伊賀小年　杜若
[illegible]相撲取　李東
[illegible]　伊賀　風麦
蕣やぬかごの蔓のほどかれて　膳所　及肩

笑ふにも泣にもにざる木槿かな　嵐蘭
手をかけておらで過行木槿かな　杉風
ある僧の嫌ひし八日の朝かな　千那
たて懸し藪の内の萩や秋の雨　史邦
こゝろしや藪の内より秋の風　且藁
秋風やとても薄はうごくはず　三川　子尹
連レの家のこゝろやすきまさ木の文
八朔や扨一しほに紫の花　羽紅
ほのぼのとしばし櫓乃音花ちりぬ
つくつくとつりあげにひとより
めづらしき花ちる道の花ぶさく　凡兆

君が手もまじるなるべし花薄　去来
草刈よそれが思ひか萩の露　平田　李由
元禄二年翁に供せられてみちのく
より越路にかゝり行脚しけるに
加賀の国にていたはり侍りて伊勢まで先
達けるとて
いづくにかたふれ臥とも萩の原　曾良
桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉
百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆
初雁に行燈とるなまくらもと　亡人　落梧
堅田にて
病雁の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉

海士の屋は小海老にまじるいとゞかな　仝

加賀への小松と云處多田乃神社の
宝物として実盛か菊から草乃
かぶと同じく錦の切あり遠き事
なからそのかみのあはれに思ほえて

むざんやな甲のしたのきりぎりす　芭蕉

菊畠や二葉に北中の黄北山峯　尚白

もろこしや穂に幕て明蔵八朔よ　風麦

いせよりまうでして帰りの附

菊月や矢橋に添ふ人もなし　亡人 千子

三ケ月に叢のあらゆるどをしける　之道

霧晴し月出ぬ夜もありぬべき月よ　洙賤

月みせん伊賀の城乃楼郭　去来

菊を蓍舎に帯して

折しろり松笠りえよ落葉秋　伊賀 土芳

加茂に詣

更くる夜の波のかゝるかの上人のなみだの
やしろ社頭にしらぬるこそをしもや

月影や猶かれて漆の上　史邦

友達の六条にかくされてくるまるに
　伊賀 卓袋

新そらし折の月から送る新月と　乙刕

くせを見るや寺くしけり月の新　文艸

京近世に年乃内から中旬中さ　

川風のおもかげや京に月ひとり　凡兆

婦りかゝるてこよひより夜月の面　尚白

向の能き宿も月見る契かな　曽良

元禄二年つるかの湊に月を見て気比の明神に詣遊行上人の古例をきく

月清し遊行のもてる砂の上　芭蕉

仲秋の望猶子を送葬して

かゝる夜の月も見にけり野辺送　去来

明月や雲まを青み菜の末まて　膳所 昌房

月見ても人の旅にはいそかはし　羽紅

堅止のいりくの小屋にまねかれ　尚白

初潮や鳴門の浪の飛脚舟　凡兆

一戸や衣もやふれてこまむかへ　去来

稗の穂の馬逃したる気色かれ　越人

誹諧やかしましくとも嵯峨の鳧　正秀

あやまりてさらにあさゆる鱈かな　嵐蘭

一貫不鳴山更幽

鐘の音ひゞきたつ業山寺　凡兆

むつかしき錦を着せて里の秋　萬乎

旅枕簾のつき合ふ軒の下　江戸 千里

旅よりや誹諧師の名を留　珍碩

上り下る雲や霞の天　凡兆

鵜鷀の鵜の見つくし鶏つり　半残

内外の間のうとき雲の葉の中　尚白

菊を切る跡まはらにもなかりけり　其角

高土の鶏の明月やしかされ　珍碩

こぬれ乃おりかくしに縮よ紋　土芳

稲こきく亀を出す月盛ふあひに　凡兆

自題落柿舎

柿ぬしや梢はちかきあらし山　去来

よし宿やゆふつく鴫の下わたり　加賀小松 塵生

肌さむし竹切山のうす紅葉　凡兆

神田祭

されハこそかれの拍子もあるなれ
神田祭の鼓うつ音　鼓足

拍子さへあつまなりけりしや　嵐雪

花すゝき大名衆をとほりけり　丈艸

刈株の日に日に弱るすゝきかな

立出る秋の夕や風ほろし　凡兆

世の中も鶉の尾のひろさかな　仝

塩魚の歯にはさかふや秋の暮　荷兮

春

梅咲て人の怒の悔もあり　露沾

上臈の山荘にまかりて候しに　なりて

梅が香や山路猟入ル犬のまね　去来

むめが香や分入里は牛の角　加賀 句空

庭興

梅が香や砂利しき流す谷の奥　土芳

うつ嬉や胃かさき身にも梅の花　半残

梅が香や酒のかよひのあらしさ　膳所 蝉嵐

むめ咲の本や汁一ッ助を薮のおろし　其角

子良館の後に梅ありといへば
御子良子の一もとゆかし梅の花　芭蕉

痩藪や作りたふれの軒の梅　千那

所々白梅ころや垣の外　允兆

日當りの梅咲ころや屋賃房　揖石 支幽

暗香浮動月黄昏
入相の梅になり込ひゞきかな　風麦

我はなお旅亭の残夢

痩ながら窓は細目や閑な梅　乙刕

辛未のとし浅草のほとりにて
あけ日くれて梅のちるをあはれむ人

明安嵐雪か...のまゝ白きを
柔肉あつくいかにと申すハあなたの
やうに柳の緑とさくらの紅れに盛動
身にあつまりて澄み切て行くあと六
その梅の花をみて見えて眠る
ゆかしき七人いはん風雅を

葱さるや　嵐雪

夢さめて又一白し有れ梅　之甫

百八のうちて来れや雲乃むめ　玄来

ひとしら梅も織女の神子日　史邦

野白梅や鷹匠のけく摘なき菜　嵐蘭

まつ市やこゝ木漕ぐる菜舩

有明月のあるはかなきかけのさしく　如行

憶公羽之客中

稲むしろ葉をつくしたん草枕　荒雪

つくづくと鴫見さしすむ夕暮に　路通

七種や跡にうかるゝ朝からす　其角

ふるさとや雛の跡なし相撲取に　丈艸

うすらひやわづかに咲る芹の花　尾張

鶯に八重のくろみは見処あり　仝

鶯よ汝こたへねよりて鶯あり　去来

鶯の雲に囀る茨の種なれ　伊賀 一桐

鶯やもゝの一あるれさかりかな　江戸 渓石

うくひすや栗の花ある処さし　其角

鶯や下駄の歯につく小田の土　凡兆

鶯や窓の春とすみるかな　伊賀 魚日

やまぶきの宮 柳もうりはすかしたり　探丸

此稲をさゝれ枝くさ柳かれ　江戸 ?宅

振こし見えてくれもと柳に　月 遠永

いさゝ川 柳ゆかれさ柳かれ　尚白

青柳のまつられや鯉か住な　伊賀 一唆

雨ふりけりや蛤いさす場の雪く　日 木白

待けりの雨雨もよそこの月　楊水

思ひ出ままをく

麦めしにやつるゝ恋か猫の妻　芭蕉

うらやましおもひ切時猫の恋　越人

うき交にかくれて猫のこゑかな　玉来

露沾が子なく饒舌の當座　亀翁

春風にめされもなくの羽織に　尚白

梅ぞ赤無れちりしほこそ二月に　亀翁

出ゐりや桜ほちまかれるてきれけ　嵐雪

出る鳥や幼くしろゝに地あつき紙　九兆

骨柴のかし枕あるゝまれ毒ありれ　真角

白魚や法華を上すきのよい人を　杉峯

人のめきくもまで惜や櫻海苔　元志

春雨にたゝき出たるつくし　荷兮

陽炎や乳つきあるこゑ法上　…

梅の名や…れさなあるね　百歳

うぐひすやほろゝし鷺の寐の砂　土芳

いくせの汐をあをぐ霊立　承回

野ゝるまでおもしろく瓶に　九兆

うぐひすや紫雉の帰けれ夜の雲　爸蓋

いとゆふに白川のそせ拝湯　配力

鶯の声にあゝしぐれ　嵐雪

彼岸まへさむさも一度二度に　路通

そのもとや常夜あるまて涅槃像　洲水

若菜ぬ裏に燕がいふ道　九兆

立ちらく今や紀のよしのゝ房　沢雉

春雨や…の山草…るゝ…　嵐虎

まさ見やしめくらり出る雲ふみの門　　猿雖

不性さやかき起されし春の雨　　芭蕉

春雨や甲斐のしまれ鶏の雲丈　　史邦

うらさびれのおくるゝや新あふちの畠　　羽紅

泥亀や苗代水の畔つたひ　　史邦

蛙なく田井の側や去年の菰　　昌房

振舞や下座になほる去年の雛　　去来

春風にこかすな雛の駕の衆　　加賀　荻子

桃柳くばりありくやをんなの子　　羽紅

ころしの花塚まつぬるもを　　三川　尚某

里人の穂蓼しまふ甲斐の花　　嵐推

燈のあかく一夜藤なる茅かな　　半残

武甲書切く白根ち薮をとり出ふ　　加賀　桃妖

いつの代にこころをもすしの花　　伊賀　園風

日の影やごもくの上の親すゞめ　　珍碩

若菜摘む春のすくひや摘の花　　土芳

闇の夜や巣をまどはして啼鵆　　芭蕉

越より飛騨へ行とて籠の渡りのあやうきところどころ道もなき山路にさまよひて

鷲の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　　凡兆

みすまより見えたる雲のうしろ穴　　伊賀　石口

子や待ん余り雲雀の高あがり　　杉風

ひばりなく中の拍子や雉子の声　　芭蕉

芭蕉菴のさびしさを訪

菫草小鍋洗しあとやこれ　曲水

春風に節旅してけふくる妙まあかぬ　江戸 山店

画讃

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　芭蕉

白魚に家をまかせつく様みれ　車来

かゝるところへやまひらあるじ来たり髪けづらんも物めかしと畔(?)にて

さくさくとして

笄もくしも昔やちりの様　羽紅

堀斗すゞしきつくりきさかな　幸園 堀氏

うぐひすを魂にねむるか嬌柳　芭蕉

もろこしまで遊ぶにこそけりけるかな　伊賀 利雪

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山ざくら　其角

一桜ちりもしぬまもはやもどる　尚白

鶏の声もきこゆるやま桜　凡兆

まちがほにはしりて折る桜　丈草

鐘角のさくらしは咲て遊さる　史邦

若菜になれてこそ六花の香　千那

葛城の神の顔をみる

猶みたし花に明行神の顔　芭蕉

いよの国花遊の宿はうつくしき

の八年様比翔に謝る是れしを修して

まん無縁とし

一里ちかきれ花ちるの子孫かや　日

古丈の墓東武谷中に有しは三墓

たて子ミ寺年のほうの知ミられ々ぬ

墓のめくりに櫻植並行るよしかくし

世れ猶ふさつくしてうの櫻を於る

儘りも他の墓ならさく咲られ行れた

まゐりしや花咲ふ鐘の経還り　國風

知人にあひしく花見かな　壺来

ある僧の姥ゆかし雲の散られ　九兆

浪人のやさしく

競在きの花かれ乍　花藪　半蔵

腥きもれ家中の中にへ小　イカ　長眉

ま物奥ゆかしや寺深く行て

大寺やよしれ奥の寺乃墨　芳臣

道灌山にのほる

居隣や花に乃代を見れ　嵐兼

源氏の絵をよみて

櫻千ふ散ちる常かれ見すかき　羽紅

庚午の歳家を焼て

焼まりけもしも花はちらすもし　加州　北枝

もれちるや伽藍の樞かくし　九兆

海棠乃もれ去満ちる夜の月　江戸　普賢

大和州郷乃くさ

草臥て宿かる頃や藤の花　芭蕉
山畠や蹴鞠よけたる尾の山桜　探丸
やさしくも海よ見んとや夕月夜　智月
色角して卯花つゝむ浴衣哉　山川
雪のあるきを見てより山路に　伊賀 式之
木芽摺
其まゝの石をかくさぬ浅茅原　乙州
春やむかしふれる初瀬の堂籠
今朝水惜まん　為有
行きえぬ上の人を知らぬる　芭蕉
鳶の羽も刷ぬはつしぐれ　去来

一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
たぬきをおどす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉
人にもくれず名物の梨　来
ウ
かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　邦
はきごゝろよきめりやすの足袋　兆
何事も無言の内はしづかなり　来
里見え初て午の貝ふく　蕉
ほつれたる去年のねござのしたゝるく　兆
芙蓉のはなのはらはらとちる　邦
吸物は先出来されしすいぜんじ　蕉

三里あまりの道かゝえける　来

この春も盧同が男居なりにて　邦

さし木つきたる月の朧夜　兆

苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉

ひとり直し今朝の腹だち　来

いちどきに二日の物も喰て置　兆

雪けにさむき嶋の北風　邦

火ともしに暮れば登る峯の寺　来

ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉

痩骨のまだ起直る力なき　邦

隣をかりて車引こむ　兆

うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉

いまや別の刀さし出す　来

せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆

おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦

青天に有明月の朝ぼらけ　来

湖水の秋の比良のはつ霜　蕉

柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦

ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆

押合て寝ては又立つかりまくら　蕉

たゝらの雲のまだ赤き空　来

一構鞦つくる窓のはな　兆

枇杷の古葉に木芽もえたつ　邦

去来九　芭蕉九　凡兆九　史邦九

史邦九

市中ハ物のにほひや夏の月　凡兆
あつし／＼と門／＼の声　芭蕉
二番草取りも果さず穂に出て　去来
灰うちたゝくうるめ一枚　兆
此筋ハ銀も見しらず不自由さよ　蕉
たゞとひやうしに長き脇指　来
草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
道心のおこりハ花のつぼむ時　来
能登の七尾の冬ハ住うき　兆
魚の骨しはぶる迄の老を見て　蕉
待人入し小御門の鎰　来
立かゝり屏風を倒す女子共　兆
湯殿ハ竹の簀子侘しき　蕉
茴香の実を吹落す夕嵐　来
僧やゝさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を経る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　来
名
五六本生木つけたる瀦（ミヅタマリ）　兆
足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉
追たてゝ早き御馬の刀持　来
でつちが荷ふ水こぼしたり　兆

戸障子もむしろがこひの売屋敷　蕉
てんじやうまもりいつか色づく　来
こそこそと草鞋を作る月夜ざし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのままにころび落たる升落　来
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やぶり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　来
ゥ さまざまに品かはりたる恋をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なにゆへか粥すするにも涙ぐみ　来
御留主となれば広き板敷　兆

手のひらに虱這はする花のかげ　蕉
かすみうごかぬ昼のねむたさ　来

凡兆十二　芭蕉十二　去来十二

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆
あぶらかすりて宵寝する秋　芭蕉
新畳敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十のさかづき　去来
千代経べき物を様々子日して　蕉
鶯の音にたびら雪降る　兆
ゥ 乗出して肱に余る春の駒　来
摩耶が高根に雲のかかれる　水

ゆふめしにかますご喰へば風薫　兆
蛭の口処をかきて気味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　来
金鍔と人に呼るゝ身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵々の月　兆
町内の秋も更行明やしき　来
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
木曽の酢茎に春もくれつゝ　兆

名

かへるやら山陰伝ふ四十から　水
柴さす家のむねをからげる　来
冬空のあれに成たる北颪　兆
旅の馳走に有明しをく　蕉
すさまじき女の智恵もはかなくて　来
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の鮓を取出す　来
堤より田の青やぎていさぎよき　兆
加茂の社は能き社なり　蕉
物うりの尻声高く名乗すて　来
雨のやどりの無常迅速　五

亘綿かゝる堂のあれたる宮さま　蕉
しゝろく水に蘭ゆうくらん　兆
糸桜腹いつはいに咲にけり　来
春は三月曙のそら　水

凡兆九　芭蕉九　野水九
去来九

餞乙劦東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
かさあたらしき春の曙　乙劦
雲雀なく小田に土持比なれや　珎碩
しとぎ祝ふて下されにけり　素男
片隅に虫歯かゝえて暮の月　劦
二階の客はたゝれたるあき　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　男
稲の葉延の力なきかぜ　碩
ほつしんの初にこゆる鈴鹿山　蕉
内蔵頭かと呼声はたれ　劦
卯の刻の箕手に並ぶ小西方　碩
すみきる松のしづかなりけり　男
萩の札すゝきの札によみなして　劦
雀かたよる百舌鳥の一声　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　劦

鑓の柄に立すくみたる花の雲　去来

屏風のきはにかゝりし笛の跡　北

名 春雨の日に伝来る経机　正秀

店屋掃くに彼のまゝうり　来

汗ぬくひ鶏の声つゝしの誰か家　半残

まことのれせりしき雛乃下　土芳

大膳に物申ひさし主なきて　残

身ハぬれ紙のふるにたのさき　芳

小刀乃蛤刃なる細工もと　残

棚に火とりし大年の額　園風

こゝもとにおりふ夜も次手なる　猿雛

初日寺合せ売るかしこさぬ　残

此夜もうれしめをとなる被子扇　凡

菜の油絞らせて志らし月見る　雛

少 咲く菊の盛ハちらりさき縁つゝむ　芳

添ヘハ手ふ行しこくめ見る龍　凡

形ふるさ浮をゆみかゝる念仏堂　嵐蘭

うす雪かゝる竹の割下駄　史邦

花に又ことしのつれも定りし　野水

雛の袂を染るそのうち　和紅

芭蕉 三　乙州 五　土芳 三

半残 三　園風 三　素男 三

猿雛 二　智月 一　嵐蘭 一

凡兆 二　史邦 一　去来 二

卅水 一 正秀 一 羽紅 一
半残 四

幻住菴記

芭蕉翁

石山の奥岩間のうしろに山有国分山と云そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし麓に細き流を渡りて翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゝせたまふ神体は弥陀の尊像とかや唯一の家には甚忌なる事を両部光をやはらげ利益の塵を同じうしたまふも又貴し日比は人の詣ざりければいとゞ神さび物しづかなる傍に住捨し草の戸有よもぎ根笹軒をかこみ屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり幻住菴と云あるじの僧何がしは勇士菅沼氏曲水子之伯父になん侍りしを今は八年計むかしに成て正に幻住老人の名をのみ残せり予又市中をさる事十年計にして五十年やゝちかき身は蓑虫の蓑を失ひ蝸牛家を離て奥羽象潟の暑き日に面をこがし高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて今歳湖水の波に漂鳰の浮巣の流とゞまるべき芦の一本の陰たのもしく軒端茨あらため垣ね結添などして卯月の初いとかりそめに入し山のやがて出じとさへおもひそみぬさすがに春の名残も遠からずつゝじ咲残り山藤松に懸て時鳥しばしば

るゝ路宿りしたる村役さしさを本つくきめつくく
さかいしくらしなとそちるる身して魂を極楽浄南
またらしてし身ハ蕭洒庵ま立つ山をも東車ふそそ
さちら人家よさ知られ侮るを南岸山峯より行ちし
小見海を浸して涼し日後乃山によの乞る根より
言語の表さ客あてめて様々を極めて絡さちて無を
筆よりよかりふ本堆の表葉の小田ふ早苗とも
青葉を飛ちふ文字乃さふあ錦乃おと香ちさ
楠としてあかとき峯明し中要を三重山を十峯
乃傍ふかちひく武藏をもて音を栖まて柳まふいてられ田
ものは古人をとそくさくふそ藤を中よりさ下袴腰と
いふ山をる足摩乃里をもくそら峯ありて綱成も

よそくよみ乃葉あ葉を花乃渡あちけらり様を眺らむひま
あらしおもし後の峯ふ遠の所の松乃棚所乃芸豪
乃用を法をもおもく積の纏掛とも身彼海営ちり
菓をいとあひさ葛浦峯ふ茅庵を結へる去る徐佺
を徒よハあられ暁聽壁山を民と風とく層を敷まて是
とあけ出し空山より風を打て鳴くとらむ心まぢ
あり朝を谷おち清水を汲く自ら散くとしくの京を
備く一炉の傍のとろしつさ昔往せん人乃孫ふ
知るく役あし待りて多くを無る抱すきもあし
枯佛一間を備く夜の飛柳さむへきこやとあくいさる
まつへりさ深を心流法をゐるるん山の僧正を加義の
甲斐信しら發子まて比くひ深山の所りいまそそへりる

ある人をして額を乞いとやすやすと筆を染て
幻住菴の三字を送らる頓て草菴の記念となしぬ
すべて山居といひ旅寝といひさる器たくはふべくも
なし木曽の檜笠越の菅蓑計枕の上の柱に
懸たり昼はまれまれとぶらふ人々に心を動しあるは
宮守の翁里の男ども入来りていのしゝの稲くひ
あらし兎の豆畑にかよふなど我聞しらぬ農談
日既に山の端にかゝれば夜座静に月を待ては
影を伴ひ燈を取ては罔両に是非をこらすかく
いへばとてひたぶるに閑寂を好み山野に跡をかく
さんとにはあらずやゝ病身人に倦て世をいとひし
人に似たり倩年月の移こし拙き身の科を

おもふにある時は仕官懸命の地をうらやみ
一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしもたどり
なき風雲に身をせめ花鳥に情を労して暫く
生涯のはかり事とさへなれば終に無能無才に
して此一筋につながる楽天は五臓の神をやぶり
老杜は痩たり賢愚文質のひとしからざるも
いづれか幻の栖ならずやとおもひ捨てふしぬ
先たのむ椎の木もあり夏木立

題芭蕉翁國分山幻住菴記之後
何世無隠士以心隠為賢也何處無山
川風景因人為美也間讀芭蕉翁幻住菴

記乃識其賢且知山川得其人而益美
矣可謂人与山川共相得焉延作鄙章
一篇歌之曰

琶湖南兮國分嶺　古松鬱兮緑陰清
茅屋竹椽纔數間　内有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川　風景依稀入誹諧
此地自古富勝覧　今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日　震軒具艸

几右日記

時鳥背中見てやる梺かな　曲水
そ川まて乃経忌つゝきりのかれの山　丹水

鶏もはら〱時か水鶏なく　去来
海山に五月雨そふや一くらミ　凡兆
軒ちかき岩梨折れる猿の胸し　千那
細脛乃やすめ處や夏の山　珍碩

蝸牛

おりふすや伐株にかけと蓮そり　野径
いりさきて蘇の葉ふかき夜のかな　里東
螢飛ぶ是もこそけ乃露　乙州
蓮や藤乃中の花ごゝろきさ　怒誰
ゑもうし峯ふ經くかり宿　探志
五明上相菴のまかもんこゝろ　元志
木つゝきふかくして鳴ける鶉哉　泥土

笠あふつ柳すゞしや風わたる　史邦

月待や海を尻目に夕すゞみ　正秀

すつきさ八一要ぬ蔓ちつむ清水かな　去人 柳陰

涼しさや只ひれ茶のむ稲の中　如行

　諸よりあるをまかり

椎の葉をとりへて晴や蝉の声　膳所 朴水

目の下や手洗ふ程る海涼し　三ッ寺井 市隠

　文まゐらせん

猿の草や早苗好けに夕涼　半残

　麦の穂を手ずがゝれをとる

一ッ葉これや香ぬ田のゝとく麦　之道

　妻音

一夏のる山さかりや旅のよさき　長サキ 魯町

夕立や檜木の奥の一ときり　及肩

　畀猿孫料

秋風や田上山のくぼしとより　尚白

　跡ゟ暮

さゝ家もすさましくてのゝ葉の末　小枝

赤履めく侍にきりの蔓のはし　木節

　色紙に書

旅まくれ葉鉢毛や萩の露　膳所 扇

稲の花これを仏の土産哉　智月

石山やほりて果せし秋の風　羽紅

桶の輪やきれて味のとをりたれ　昌房

里ふ心の傍ケナめし風乃ゆつきか　何処
時雨やいつしく路ふほとゝりのさえる也　越人
越人とゝ向しく行ん含く　等哉
蓮の実の供はぬ入菴られ　嵐蘭
蜘の年紛白菴あやしも果んとの出を　史邦
同夏
涼しさや此菴をさへ住捨し　芳良

跋

攘蒼葭者邑茸以徘諧登之首韻也非其不彼山等
偷衣朝市項冠笑呂住心感物写言無一而已矣

洛下逸人凡兆去来蹟与羽遊学様鏡竹窓編營
凌節斯有家為撰此集玩其会邑自謂逸
超孤賑白裘青也於足四方嗟友憧々往来或
千里寄書之中皆有佳句月蘊月隆各称文
章我有昆仲賢士不集録者索居寡旅為難
通信且有庵倪婦人不琢磨者廉言細語為愛且
志雖無至其域何棄其人乎哉早不分四季作六巻
故不遑廣捜他家文林也維時元禄四年辛未
仲夏余掛錫於洛陽旅亭偶会兆来吟与見
需把筆其見以卒援其毫不揣拙魯廃幾一二義高
張有補于詞海漁人云

風狂世衲
丈草漢書

正行書之